

豊川市教育委員会 生涯学習課発行

発掘だよりNo.39

平成17年8月20日(土)発行

〒442-8601 豊川市諏訪1丁目1番地

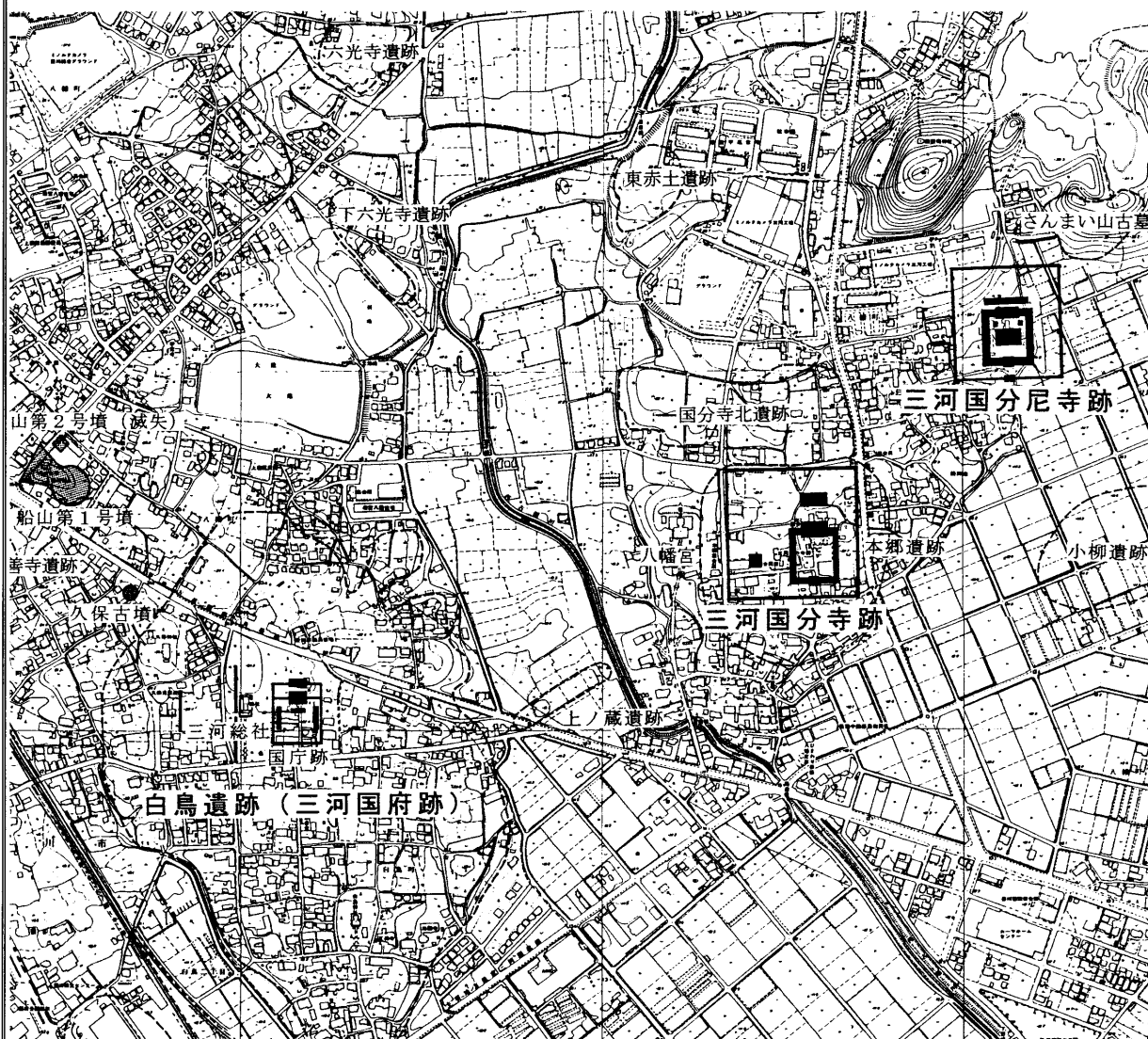
TEL(0533)89-2158 (直)

三河国府跡第13次調査の概要

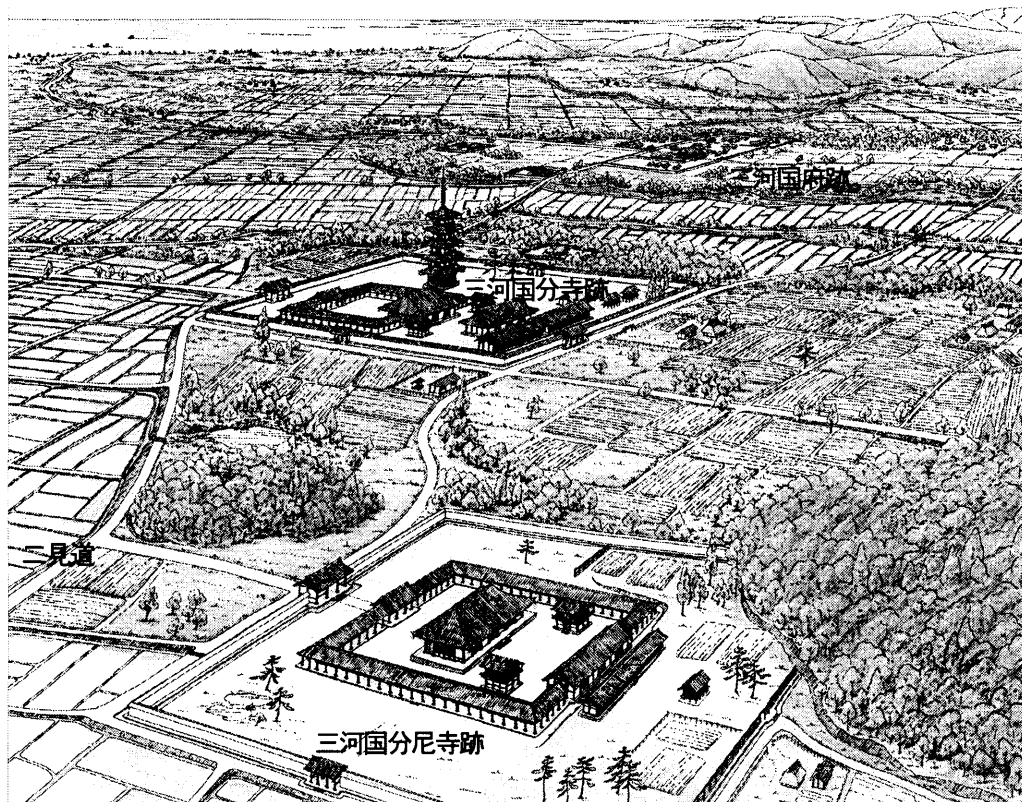
豊川市の西部地区には「三河国分寺跡」「三河国分尼寺跡」「三河国府跡」といった古代の重要遺跡が三点セットでそろっています。

このうち「三河国分寺跡」「三河国分尼寺跡」については、過去の確認調査で、^{がらみ}伽藍配置や変遷過程などその様相が明らかとなっています。

ところが、「三河国府跡」についてはその様相がほとんど解っていなかったため、市教育委員会では、平成3年度以来三河国府跡の重要遺構を確認するための発掘調査を実施しているところです。



三河国府跡の周辺



国分寺・国分尼寺・国府の復元鳥瞰図

過去の発掘調査

今回の発掘調査で13次を数える三河国府跡の発掘調査は、平成3年度に第1次調査を実施し、調査を行うごとに、新たな発見がありました。

ここでは、主な調査ごとに得られた成果を簡単に記しておきます。

○第1次調査（平成3年度）・第2次調査（平成4年度）

総社西側の地点で実施。国府中枢の遺構は検出されなかったが、大型掘立柱穴が12ヵ所で確認されました。後にこの施設が国府曹司（諸官衙）を区画する堀になるものと想定されました。

○第5次調査（平成6年度）

初めて、調査地点を三河総社境内地に移し、調査を行う。総社拝殿西側に調査区を設けたところ、幅約3mの区画溝が検出されました。後の第7次調査（平成7年度）において、さらに南側に延長することが確認され、南北117mにも及ぶ大溝であることが判明し、国府外郭の区画溝であることが想定されました。

○第8次調査（平成8年度）・第9次調査（平成9年度）

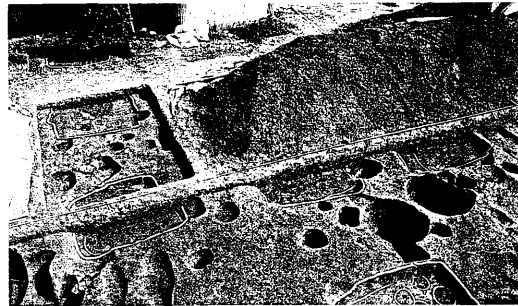
国府中枢の建物群である国府跡を確認しました。現在の曹源寺境内地を中心に、正殿、後殿、前殿、西脇殿、北面・西面区画施設等の重要遺構を検出しています。

その変遷は、Ⅰ期からⅢ期まではほとんど同じ場所で建て替えが行われ、Ⅰ・Ⅱ期が掘立柱建物、Ⅲ期が礎石建物に変わることが明らかとなりました。

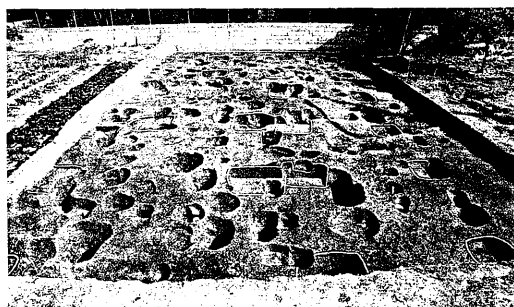
なお、この時の調査では、東脇殿、東・南区画施設、南門等が確認されておらず、その確認については後の調査に委ねられることとなりました。



①正殿跡



②後殿跡



③前殿跡周辺



④西脇殿跡

確認された国庁の主要建物

第13次調査の概要

第9次調査以来、国庁域の調査は行われておらず（註1）、東脇殿、東・南区画施設、南門等の重要施設が不明なまま今日に至りましたが、土地所有者の方のご好意により、調査の承諾が得られたため、今回調査を行うことができました。

調査にあたっては、国庁建物群が中軸線（ちゅうじくせん）を境に左右対称であるという想定のもと、東脇殿推定地に調査区を設けて調査を行いました。

調査は6月上旬から開始し、8月末までに埋め戻しを完了する予定で進めました。

確認された遺構

調査区のほぼ全面から東脇殿と考えられる大型の掘立柱建物跡（SB701）が確認されています。建物規模は、東西2間の5.4m（天平尺の18尺、註2）、南北9間の24.7m（83尺）と非常に大きなものです。このうち北端と南端の端の間は10尺ですが、それ以外はすべて柱間が9尺の造りとなっています。

建物変遷は、正殿、後殿と同様に3期変遷が確認され、Ⅰ・Ⅱ期が掘立柱建物、Ⅲ期に礎石建物（註3）に変わっています。なお、Ⅰ・Ⅱ期の掘立柱建物が非常に大きな堀形を持つ柱穴であるのに対し、Ⅲ期の礎石は非常に小さなものとなっています。何らかの要因から、急場しのぎで建物を建てる必要があった可能性も考えられます。

建物の存続期間は、その出土遺物からⅠ期が8世紀中頃から9世紀中頃、Ⅱ期が9世紀中頃から10世紀初頭、Ⅲ期が10世紀初頭から10世紀中頃と推定されます。

このうちⅠ期の時期の存続期間が非常に長く、果たして掘立柱建物でこれほどの長期間、建物が存続できるものか、疑問に感じざるを得ません。今後に検討を要します。

この他には、調査区南西隅から大型の掘立柱建物柱穴が2ヶ所で確認されています（SB704）。一部のみ

の検出であり、その全貌は分かりませんが、柱穴の大きさから考えて、今回の調査区の南西側には、大型の掘立柱建物が存在する可能性が考えられます。この建物の時期は、遺構の状況から、国庁の建物群よりも古い時期に置かれ、7世紀末から8世紀初頭ではないかと考えています。なお、平成9年度の前殿の調査区から、主軸の異なる四面庇建物（SB601）が確認されており、この建物と今回検出されたSB704の主軸が同じであることから、SB601とSB704が同時に二棟並んで建っていた可能性も考えられます。興味深い調査事例であることから、今後の調査に期待がかかります。

この他には、^{りつりょう}律令期の国府が廃絶した後に、人々がこの地で生活していることが分かっており、中世から近世にかけての小型の掘立柱建物柱穴が多数確認されているほか、井戸跡なども見つかっています。

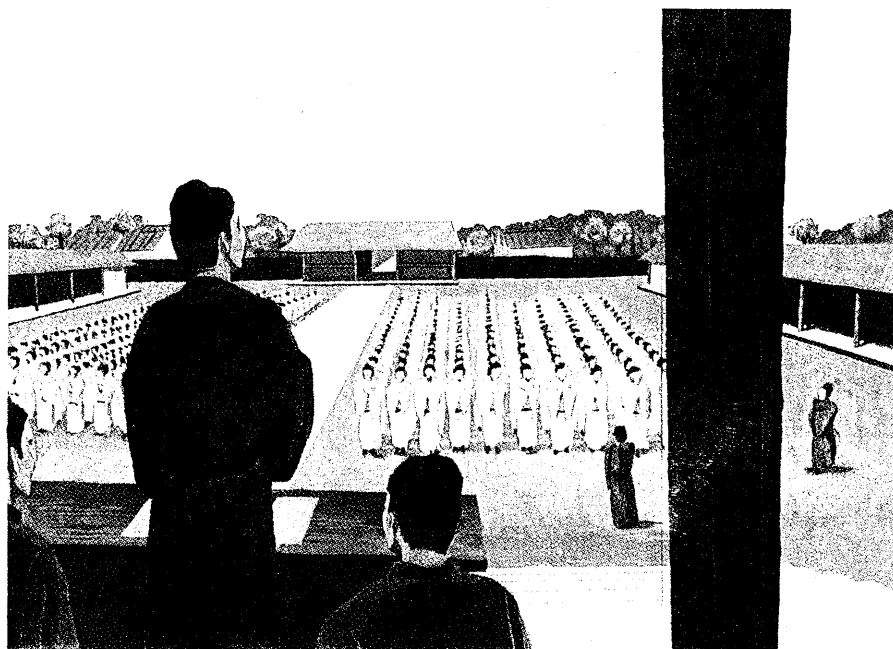
国府が置かれた台地は、後の人にも生活しやすい場所だったのでしょう。

国庁の建物群について

国庁は、^{こくし}国司が政務・儀式・饗宴などを行う国府の中でも最重要施設であり、中心建物である正殿を中心に、広場（前庭）を囲むように前殿・後殿・脇殿といった建物がコの字形に配置されます。

国司の長官である^{かみ}守が正殿に着座し、^{すけ}介・^{じょう}掾・^{さかん}目といった国司は東西脇殿に着座して重要な政務、儀式、饗宴といった国府の重要催事が執り行われていたものと考えられます。

この時、前庭と呼ばれる広場には、三河国内から郡司や豪族達が招集され、整然と並びこれらの催事に参加していたものと思われます。



国庁での儀式の様子

（註1）第10次調査は平成12年度、第11次調査は平成14年度、第12次調査は平成17年度に行われ、いずれも、国庁域外側の国府域内で実施されました。

（註2）天平尺の1尺は29.7cm前後。

（註3）通常の地上に露出している礎石とは様相を異にし、地下に埋設された礎板石に近い礎石の可能性が考えられます。

出土遺物

今回の調査では、国庁という通常日用品をあまり使用しないエリアでの発掘調査であるため、出土遺物は非常に少なく、コンテナに換算して5箱程度しか出土していません。

特に目立った遺物も今回は出土していませんが、過去の国府跡発掘調査では、以下に示した重要な遺物が出土しています。



羊形硯

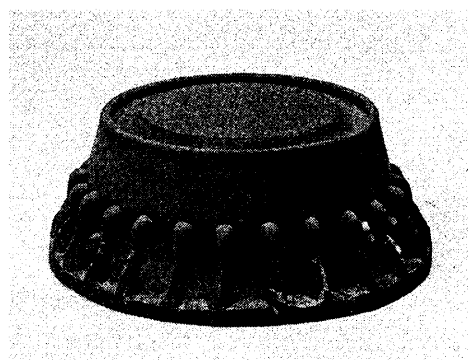
(中：三河国府跡出土、上・下

：平城京跡出土〔奈良文化財研究所蔵〕)

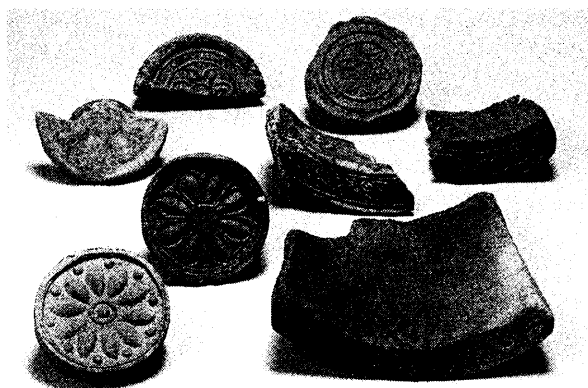
奈良文化財研究所許可済

00D 地点 SX210 出土の羊形硯

(国司が使用していたものと考えられます。)



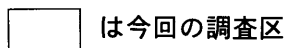
直径 30 cm を越える蹄脚円面硯

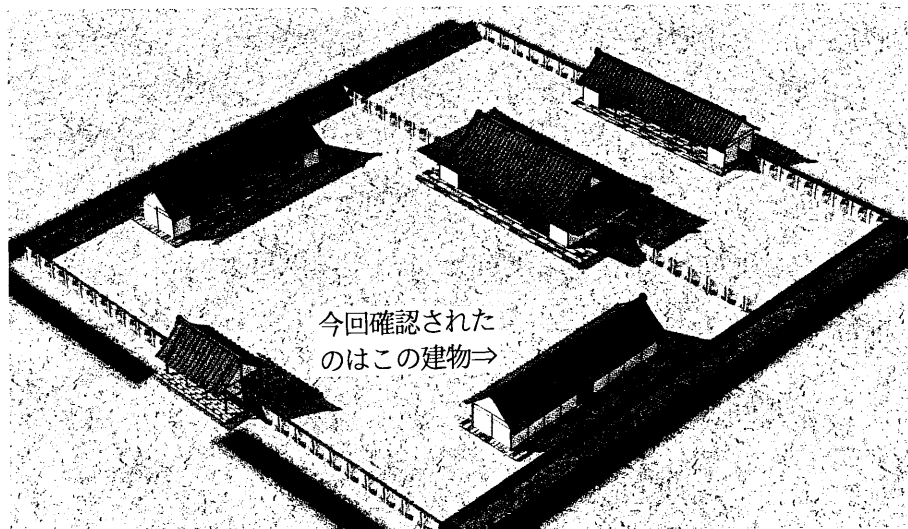
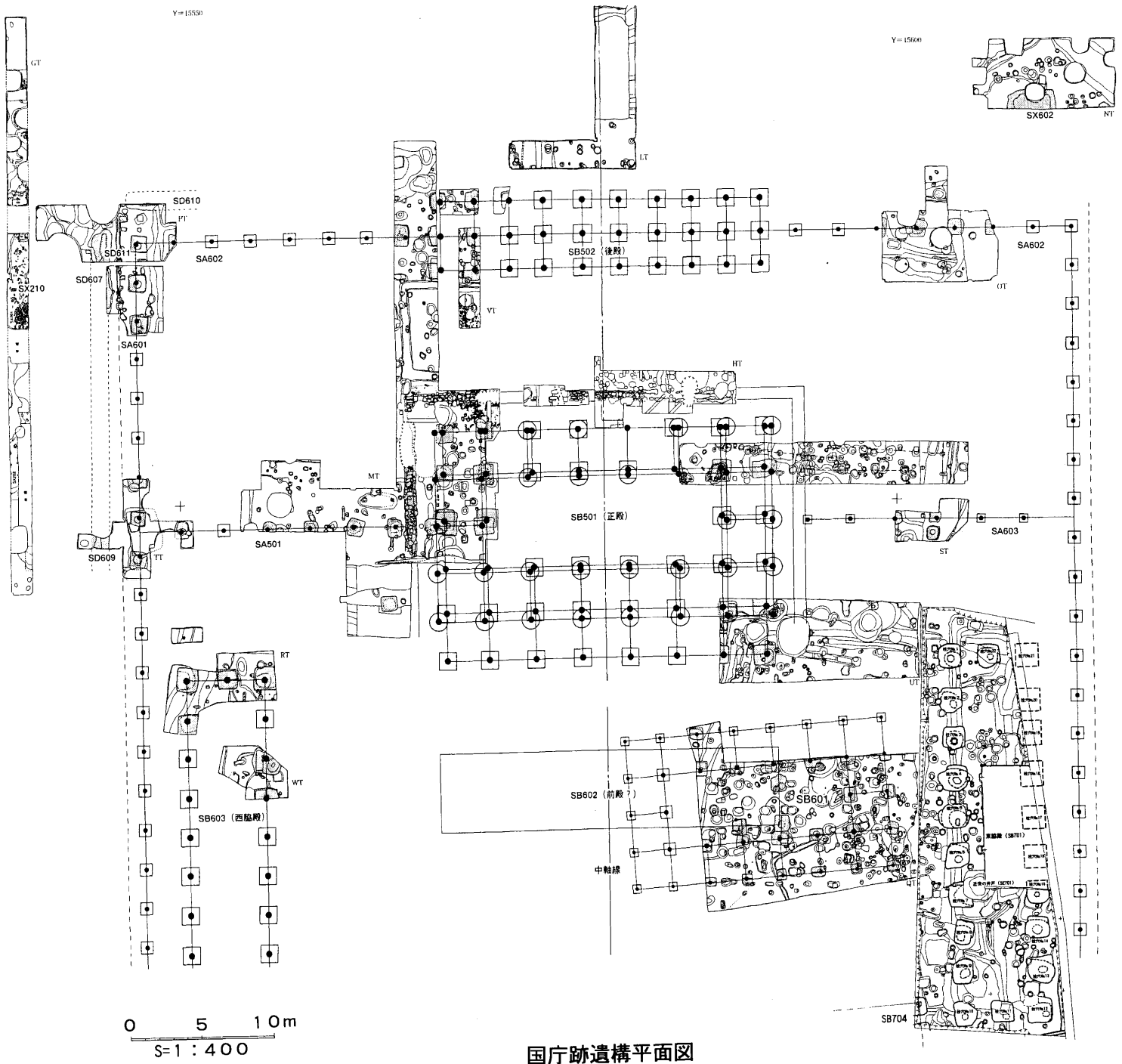


国府跡出土軒瓦 (手前左が北野廃寺系軒丸瓦)

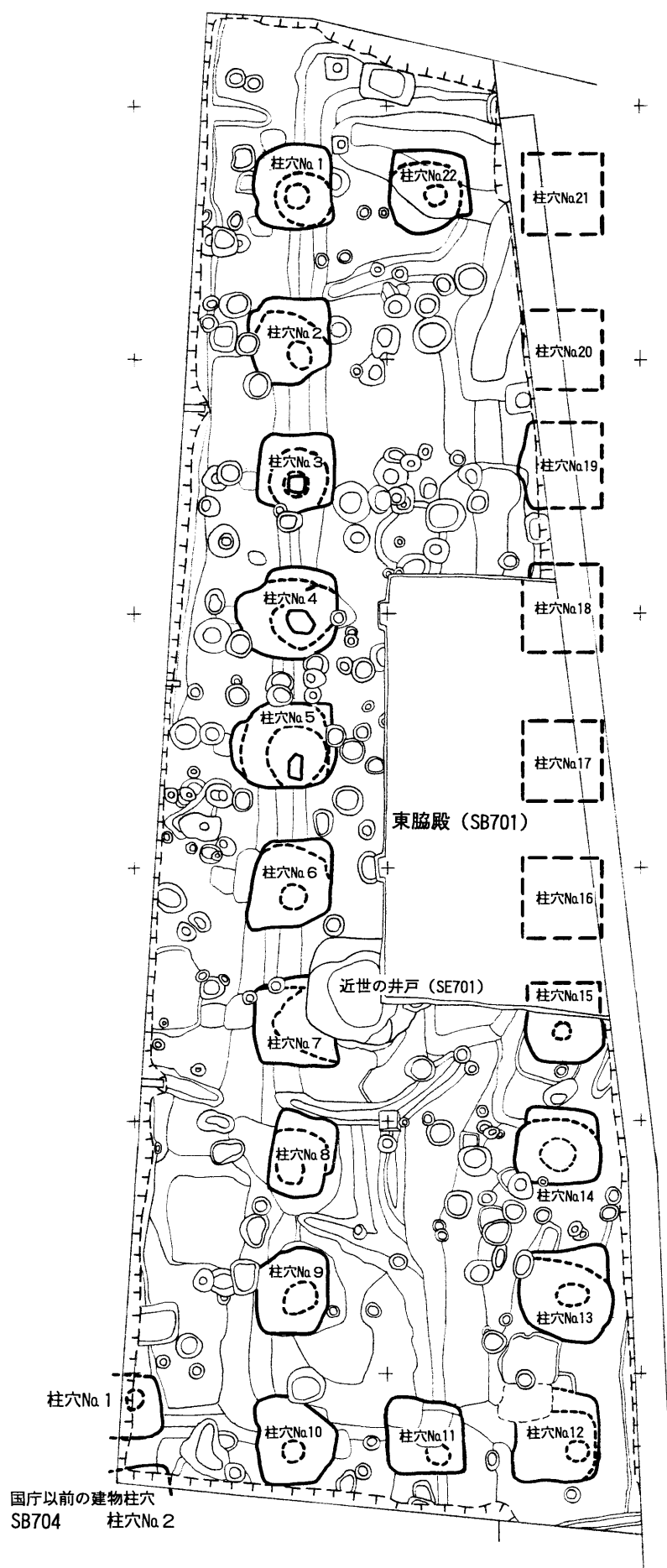


陶製印破片 (賀茂郡印か?)

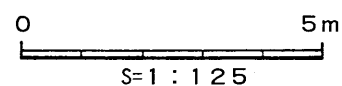




三河国庁復元想像図（Ⅲ期、CGにて作成）



国庁以前の建物柱穴
SB704 柱穴No. 2



三河国府跡第 13 次調査遺構平面図